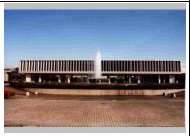
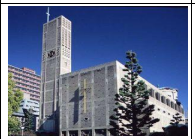
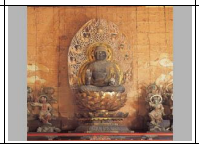
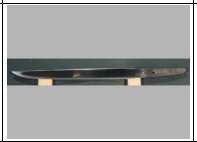
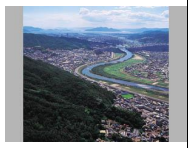
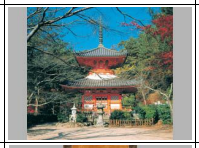
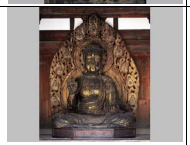
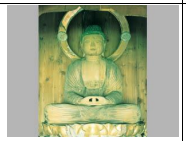
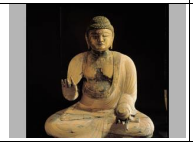
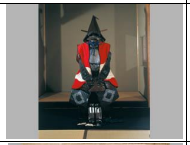
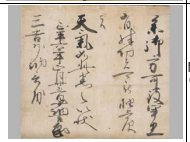
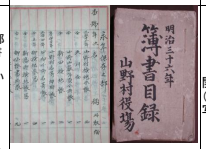
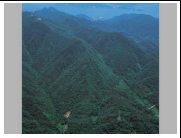
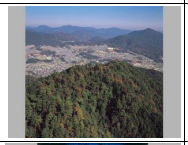
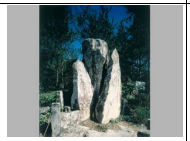
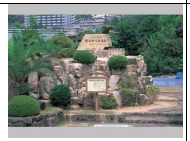
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	国宝（建造物）	不動院金堂	ふどういんこんどう	1棟	広島市東区牛田新町	明33.4.7 昭33.2.8（国宝指定）	桁行三間，梁間四間，一重，裳階付，入母屋造，こけら葺		戦国時代建立の禅宗様建築。天井墨書から天文9年（1540）頃建立と推定されている。 大内義隆が周防（すおう）山口に建てた建物を安国寺恵瓊（あんこくじえけい）が安芸安国寺仏殿として移築したと伝えられる。現存する禅宗様の建築としては規模の大きい遺構であり，繊細な禅宗様の手法を用いながら，容姿には雄大な気風がうかがわれる，中世の本格的建物である。 不動院は，中世，安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが，安国寺恵瓊が再建に尽力し，現存する建物の多くが恵瓊によって建てられたといわれる。江戸時代に禅宗から真言宗に変わり，寺号も宥珍（ゆうちん）が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。 ※大内義隆（1507～1551）…防長（現在の山口県）を拠点とした守護大名。 ※安国寺恵瓊（？～1600）…毛利氏の使僧。主に織田信長や豊臣秀吉との交渉にあたった。		
国	重要文化財（建造物）	不動院鐘楼	ふどういんしょうろう	1棟	広島市東区牛田新町三丁目	昭27.7.19	桁行三間，梁間二間，白壁塗の袴腰付鐘楼，入母屋造，柿葺		室町時代，永享5年（1433）建立。解体修理の結果，安国寺恵瓊（えけい）が住持であった天正16年（1588）頃に，修理・移築されたと推定されている。白壁塗の袴腰（はかまこし）付鐘楼で，外観は各部の釣合がよく整っている。細部は和様三手先（みてさき）の組物（くみもの）を用いているが，軒は二軒扠柱（にけんおうぎばしら）で，隅木（すみき）も禅宗様の手法をとっているのは珍しい意匠である。二階の頭貫鼻等には文禄頃（1592～1596）とみてよい手法が混じている。後補の痕は少ない。内部に銅製梵鐘（重文）を納める。 不動院は，中世，安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが，安国寺恵瓊が再建に尽力し，現存する建物の多くが恵瓊によって建てられたといわれる。江戸時代初め（17世紀初頭）に禅宗から真言宗に変わり，寺号も宥珍（ゆうちん）が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。		
国	重要文化財（建造物）	不動院楼門	ふどういんろうもん	1棟	広島市東区牛田新町	昭29.9.29（県指定） 昭33.5.14	三間一戸二階二重門，入母屋造，本瓦葺		室町時代末期から安土桃山時代（16世紀後半）の頃に建立された門。 禅寺の山門に一般的だった禅宗様の二重門で，上層には十六羅漢像が安置されている。この時代の建物としては，ほとんど和様を交じえていないのはかえって珍しい。上層の勾欄（こうらん）は親柱だけ禅宗様の逆蓮柱とし，他は和様である。 寺伝によると安国寺恵瓊（えけい）が朝鮮半島から持ち帰った材木で建てたと言い，上層の尾垂木（おだるき）に「朝鮮木文禄三」の刻銘や斗供（ときょう），緑長押などの「朝鮮」の墨書から，一部の材料に朝鮮半島の木を使い，文禄3年（1594）頃に建立したと思われる。ただし，細部にそれより少し溯った室町時代末期の様式手法が見られるので，文禄のは修理かとも思われる。 不動院は，中世，安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが，安国寺恵瓊が再建に尽力し，現存する建物の多くが恵瓊によって建てられたといわれる。江戸時代（1603～1867）に禅宗から真言宗に変わり，寺号も宥珍（ゆうちん）が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。		
国	重要文化財（建造物）	國前寺 本堂　1棟 庫裏　1棟	こくぜんじ	2棟	広島市東区山根町	平5.12.9	本堂／桁行24.0m，梁間14.0m，二重，寄棟造，唐破風造向拝一間，背面仏間突出，桁行5.3m，梁間9.8m，一重，寄棟造，本瓦葺 庫裏／桁行17.7m，梁間13.2m，一重，切妻造，妻入，東側面庇付，本瓦葺，正面庇，本堂間廊下及び正面東方土塀附属		本堂は寛文11年（1671）建立。寄棟造りの二重屋根で，向拝（こうはい）は唐破風造り，錣（しころ）葺きの屋根をもつ仏間が背面に突出している。全体的には住宅風な意匠で造られている。庫裏（くり）は切妻造りに錣葺きの屋根をもち，破風を漆喰で塗り込めている。 いずれも広島藩の日蓮宗寺院の中でも大規模なもので，藩を代表する近世の社寺建築として価値が高い。 國前寺は，暦応3年（1340）日蓮宗寺院・暁忍寺として開かれたが，明暦2年（1656），広島藩二代藩主の浅野光晟（あさのみつあきら）夫人の菩提寺（ぼだいじ）となり，現在の寺名となった。 ※錣葺（しころぶき）…屋根の途中で段がつく葺き方		
国	重要文化財（建造物）	広島平和記念資料館	ひろしまへいわきねんしりょうかん	1棟	広島市中区中島町	平18.7.5	鉄筋コンクリート造，二階建，一部三階，高さ16.8m		広島平和記念資料館は，平和記念公園の中心施設である。 実施設計は丹下健三（たんげけんぞう）が行い，昭和26年2月に着工され，昭和30年8月24日に開館した。 広島平和記念都市建設法に基づき最初に着手された平和記念施設で，都市と一帯となった建築物として構想されており，ピロティの造形やルーバーの意匠などに丹下健三の建築的特徴がよく示されている。また，国際的に高い評価を受けた最初の戦後建築であり，丹下健三の出発点となる建築として重要である。		関連施設：広島平和記念資料館（082-241-4004）
国	重要文化財（建造物）	世界平和記念聖堂	せかいへいわきねんせいどう	1棟	広島市中区幟町	平18.7.5	三廊式教会堂，鉄筋コンクリート造， 地上三階，地下一階，銅板葺，塔屋付		世界平和記念聖堂は，原爆犠牲者を弔い，世界平和の実現を祈念する場として企図された教会堂で，被爆都市広島における戦後復興建築の先駆的建築である。 設計は村野藤吾（むらの　とうご）が行い，昭和25年（1954）8月6日定礎，同29年（1950）8月6日に献堂された。 堂，塔，小聖堂等の構成や量的比例も優れており，鉄筋コンクリートの柱梁フレームにセメントモルタルレンガを充填する新しい手法により，日本的性格と記念建築の荘厳さを持たせつつ，戦後の新しい時代に適応した宗教建築を実現したことで評価される。また，戦後村野藤吾の宗教的空間や公共的建築の原点となる作品としても重要である。		
国	重要文化財（建造物）	旧広島陸軍被服支廠倉庫施設 10番庫 11番庫 12番庫 13番庫	きゅうひろしまりくぐんひふくししょうそうこしせつ	4棟	広島市南区出汐二丁目	令和6年（2024）1月19日	柱や梁、スラブなど主な構造を鉄筋コンクリート造（ぞう）とし、外壁などを煉瓦造（れんがぞう）とする		日露戦争後、陸軍における兵站施設の充実のため大正3年に建設された。陸軍本省が設計を掌り、陸軍大臣の令達により第五師団が実施設計と工事を担った。柱や梁、スラブなど主な構造を鉄筋コンクリート造（ぞう）、外壁などを煉瓦造（れんがぞう）とする希少な建造物で、鉄筋コンクリート造として現存最古級。特異な形状の鉄筋を用いるカーン式鉄筋コンクリートの遺構としても希少。基礎に場所打ちコンクリート杭の嚆矢であるコンプレッツル杭を採用し、屋根はモルタル製の桟に引掛桟瓦（ひっかけさんがわら）を葺くなど、先駆的な技術を用いる。被爆後に臨時救護所となり、以降も継続して使用されてきた被爆建物である。旧陸軍被服廠の関連施設のうち、現存唯一の遺構としても歴史的に価値が高い。		（参考URL） https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/hihukushisyo/
国	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	広島市東区牛田新町三丁目	大6.8.13	檜材，寄木造，漆箔	像高140cm	平安時代初期（9世紀）の作で，宝徳2年（1450）に修復されている。 不動院金堂の本尊で檜材，漆箔塗り。火災二重円光を背にし，右手は施無畏（せむい）印，左手に薬壷をのせた面相が円満で，衣文の流麗な定朝様の仏像である。脇侍の日光・月光菩薩を欠いているが，その代わりに彫ったものであろうか，須弥壇の勾欄（こうらん）の中央に宝輪，その左右の雲上に日輪・月輪の彫刻がはめこんである。 台座敷茄子（なす）の獅子裏に「源雅信助口」の名や「宝徳二年十月日」の年号があり，光背（こうはい）の裏に朱書きで「大仏師右京左京」と記されており修補を物語っている。		

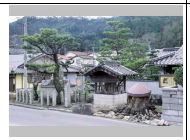
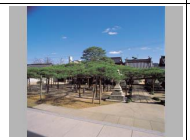
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像 像内に仁平四年造立の銘がある	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	広島市西区三滝町	昭33.2.8	檜材，寄木造，漆箔	像高85cm，膝張73cm	全体的に温和な風格が漂う定朝様の作風になり,像内の墨書銘で河内錦郡日野村（現在の大阪府河内長野市）の観音寺に，同寺の壇越である道俗男女が，平安時代，仁平4年（1154）11月に寄進したことが知られる。 容姿は肉髻は高く肉髻相は上部にあり，白毫は比較的小さく眉間の上方にある。衣文は前期に見られる翻波式は見られない。いわゆる来迎印を結んでいる。温和な風格が漂う平安彫刻の標準形である。肉髻を大きく作っているところ河内・和泉あたりの地方特色である。 ※定朝様（じょうちょうよう）…11世紀に仏師定朝が完成した様式。寄木造りの手法により胸を平かに,膝を広く低くし,顔は円満具足の相を持つ。 ※来迎印（らいごういん）…往生,臨終の際,極楽浄土から迎えにくる阿弥陀如来のとる印相 ※肉髻（にっけい）…頭部の肉が隆起する部分 ※白毫（びゃくごう）…眉間に生えた白い巻毛		
国	重要文化財（工芸品）	銅製梵鐘（伝僧恵瓊将来）	どうせいぼんしょう	1口	広島市東区牛田新町三丁目	明32.8.1		高さ160cm，直径65cm	不動院鐘楼（重要文化財）にあるこの梵鐘は，毛利・豊臣両氏に信頼の厚かった安国寺恵瓊（あんこくじえけい）が，朝鮮半島から持ち帰ったと伝えられる高麗（こうらい）初期の名鐘である。蓮華文の撞座（つきざ）が4個鋳出される。撞座中央に菩薩坐像があり，「信相菩薩」の銘が刻まれている。鐘の身の上下両端に唐草文様が彫り出され，四面には天女が衣をなびかせながら雲上を舞う姿を刻んでおり，その文様はすぐれてより美しい。 不動院は，中世，安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが，安国寺恵瓊が再建に尽力し，現存する建物の多くが恵瓊によって建てられたと言われる。江戸時代に禅宗から真言宗に変わり，寺号も宥珍（ゆうちん）が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。 ※高麗…10世紀初めに興った朝鮮半島の国家。1392年滅亡。		
国	重要文化財（工芸品）	短刀　銘山城国西陣住人埋忠明寿 慶長十三年三月日	たんとう	1口	広島市中区上幟町	昭27.3.29			江戸時代，慶長13年（1608）製造の山城国（現，京都府）の刀匠・埋忠明寿（うめただみょうじゅ）の作である。彼の作品には短刀が多く,刀身に龍の彫刻を施したものが多い。 この短刀に彫りこまれた玉追いの龍の顔は,下あごが大きく角張った受け口で,明寿の特色をよく表している。		
国	重要文化財（工芸品）	短刀　銘國廣（号堀川國廣）	たんとう	1口	広島市中区上幟町	昭30.2.2			安土桃山時代（1573～1602）の刀匠,堀川國廣（ほりかわくにひろ）作の短刀。堀川國廣は,日本各地を遍歴して作刀した後，慶長年間（1596～1615）の初めから京都一条堀川に住み,多数の門人を抱えて何人もの名工を育てた。その豪放な作風で名声を得，慶長19年（1615）死亡したと伝えられる。 この短刀には年紀がないが,作風から見て,彼の円熟期にあたる慶長7～8年（1603・1604）頃のものと考えられている。		
国	重要文化財（工芸品）	色絵花卉文輪花鉢　伊万里	いろえかきもんりんかはち　いまり	1口	広島市中区上幟町	平4.6.22	色絵磁器	高11.5cm，口径24.3cm，高台径10.3cm	江戸時代初期，1680年代製作と推定されている色絵の磁器。ドイツのザクセン選帝候・アウグスト1世（1670～1733）の収蔵品のひとつであった。日本最大の色絵磁器生産地・佐賀県有田地方で製作され輸出されたもので，特に輸出用最高級色絵磁器として発展した柿右衛門（かきえもん）様式の作品である。型づくりによる端正な形と洗練された雰囲気をもち，柿右衛門様式として技術的・様式的に最も完成されたものである。		関連施設：広島県立美術館（082-221-6246）
国	重要文化財（典籍）	紺紙金泥宝篋印陀羅尼経 道喜ノ序アリ	こんしきんでいほうきょういんだらにきょう	1巻	広島市西区己斐西町	明43.4.20	八曲屏風裏書		平安時代・康保2年（965）に僧道喜が伊豆の寺においてこの経を感得し，自ら紺紙に金泥で書写した経。その後，現在の佐伯区内の寺院に伝わった後，西福院七世増真上人（江戸時代，17～18世紀初頭の人）によって西福院にもたらされたという。1行17文字で，界線・文字ともに金泥で描かれ，美術的にも優れた装飾経である。巻首五十字を欠くが，書写の由来を記した宝篋印経記が巻頭にあり，貴重である。 ※宝篋印陀羅尼経…これを書写し読誦（どくしょう）するか，あるいはこの経巻を納めた宝篋印塔を礼拝すれば，罪障は消滅し，三途の苦は免れ，寿命長遠であるなど無量の功徳を説いた経。 ※金泥（きんでい）…金粉をにかわで溶かした顔料		
国	重要文化財（考古資料）	安芸福田木ノ宗山出土青銅器 横帯文銅鐸　1点 銅戈　1点 細形銅剣　1点	あきふくだきのむねやましゅつどせいどうき	3点	広島市南区宇品御幸	昭27.7.19		銅鐸／高さ19cm 銅戈／長さ29cm 細形銅剣／長さ39cm	明治24年(1891)に，光町尽三郎氏が木の宗山の鳥帽子岩（広島市東区福田町）の下から銅鐸，銅剣，銅戈（どうか）が弥生土器と一緒に発見したと言われている。このような出土状態はきわめて稀で，後に近畿を中心に分布する銅鐸と北部九州を中心に分布する銅剣，銅戈とが共存したことを証する貴重な資料である。このような銅鐸は「福田型銅鐸」とも言われ，九州，中国地方に分布し，数多い銅鐸の中でも形態及び特異な文様から見て古い段階の銅鐸とされている。		
国	重要文化財（歴史資料）	広島頼家関係資料	ひろしまらいけかんけいしりょう	5,547点	広島市中区袋町5-15 頼山陽史跡資料館	R6.8.27	著述校本類　65点 文書・記録類　3,483点 書状類　1,587点 絵図類　41点 典籍類　124点 書画類　78点 器物類　169点		広島頼家は、江戸時代後期の著名な漢学者・頼(らい)山陽(さんよう)を生み出した家で、山陽の父春(しゅん)水(すい)以降広島藩の藩儒となる優れた儒学者を輩出した。 本資料は、頼家の人々が作成あるいは授受した著述(ちょじゅつ)稿本(こうほん)類、文書・記録類、書状類のほか、絵図類、典籍(てんせき)類、書画類、器物類から構成され、同家の広島藩藩儒としての事績を明らかにするとともに、同家における修学や儒教祭祀のありよう、同家と学者・文人・為政者との幅広い交流の具体を伝える。 本件は、頼家の人々に関する学問の内容と生涯の事績を研究する上での基礎資料で、儒学者の家の成り立ちと展開、同家の生活文化を窺わせるなど、わが国の江戸時代における思想史・文化史上に学術的価値が高い。		関連施設：頼山陽史跡資料館（広島県立歴史博物館分館、082-298-5051）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要有形民俗文化財	湯ノ山明神旧湯治場	ゆのやまみょうじんきゅうとうじば	1件	広島市佐伯区湯来町和田	昭49.2.18			湯ノ山には古くから鉱泉の湧出があり，寛延年間（1748～1750）以来藩主の入湯もあり，湯の山明神の霊験の湯として知られていた。現在は旧湯坪の崖下に共同浴場を新設して使用している。その上段に旧来の湯坪があり，岩崖を掘り(ぼめた素朴なもので，湯屋の板壁には入湯者の墨書の数々が残されているなど，当時の姿をよく伝えて保存されており医療とそれにまつわる信仰の様相をよく伝えている。		
国	特別史跡	原爆ドーム （旧広島県産業奨励館）	げんばくどーむ（きゅうひろしまけんさんぎょうしょうれいかん）		広島市中区大手町1丁目	平7.6.27（史跡指定） 令7.9.18（特別史跡指定）			原爆ドームは，昭和20年（1945）まで広島県産業奨励館と呼ばれていた。大正3年（1914）細工町の元安橋の東河畔に，広島県物産陳列館として建築され，大正4年（1915）に開館した。 館の業務は，県内の物産販路開拓や生産品の陳列及び委託販売等であった。しかし，戦争が激しくなると，産業奨励館の展示も徐々に縮小され，昭和19年（1944）3月31日には館の業務は廃止された。 戦局も悪化した昭和20年（1945）の8月6日，原子爆弾が産業奨励館の東方約150m，高度約580m前後の地点で爆発した。産業奨励館も爆風と熱線を浴びて大破，全焼したが，建物本体は奇跡的に倒壊を免れた。当時，この建物内にいた約30名の職員は全員即死した。 戦後，原爆ドームは原爆の惨禍とともに平和を訴えるシンボルとして保存され，昭和42年（1967）と平成元年（1989）には保存修理が行われている。 平成8年（1996）には，厳島神社とともに世界遺産に登録された。		関連施設：広島平和記念資料館（082-241-4004）
国	史跡	頼山陽居室 ※頼は旧字	らいさんようきょしつ		広島市中区袋町	昭11.9.3			頼山陽は，江戸時代後期に活躍した漢学者・文人で，幕末の志士たちに多大な影響を与えた歴史書『日本外史』の著者として知られている。安永９年（1780）に大坂で生まれた山陽は，翌天明元年（1781）に広島藩が学問所を創設するのに伴って，父春水（しゅんすい）が儒学者として登用されたため，翌年両親と共に広島に移住する。 寛政元年（1789），父春水は藩から杉ノ木小路（すぎのきしょうじ）（今の袋町・中町の境）に屋敷を拝領する。この屋敷は，現在の頼山陽史跡資料館の敷地にあった。 山陽はここで成長し，寛政９年（1797）には１年間江戸に遊学する。そして，寛政12年（1800）に脱藩して京都に行くが，すぐに連れ戻され，屋敷の離れに幽閉された。この離れが，現在の頼山陽居室である（当時の居室は原爆で焼失し，昭和33年［1958］に復元された）。 ５年間幽閉された山陽は，その間ひたすら文筆活動に専念し，歴史書『日本外史』の草稿をまとめる。幽閉が解けると，山陽は神辺（福山市）や京都に移り住み，様々な著述に励む。そして，天保３年（1832）に53歳で亡くなる。 頼山陽史跡資料館は，このような生涯を送った頼山陽や広島の近世文化に関する様々な資料を展示している。		関連施設：頼山陽史跡資料館（広島県立歴史博物館分館、082-298-5051）
国	史跡	広島城跡	ひろしまじょうあと		広島市中区基町	昭28.3.31			戦国時代（16世紀）に，郡山城を本拠として，中国9か国を平定した毛利氏は，天正17年（1589）輝元（てるもと）の代に，太田川の三角州に大規模な築城をはじめ，天正19年（1591）に入城した。これが広島城である。毛利氏は在城9年ばかりで，関が原の戦いの後に防長に追われたが，その後も，福島氏・浅野氏の居城として城下町が経営され，今日の広島市発展の基となった。 広島城の旧来の建築は原爆によりすべて焼失し，現在の天守閣は昭和33年（1958）建築の鉄筋コンクリート造である。		関連施設：広島城（082-221-7512）
国	史跡	中小田古墳群	なかおだこふんぐん		広島市安佐北区口田町，口田南町，口田南3丁目	平8.11.11			中小田古墳群は，太田川下流左岸の太田川に沿って南から北にのびる標高60～130mの丘陵に存在する12基からなる古墳群である。 昭和36年（1961）に三角縁神獣鏡や甲冑類などが発見され，昭和54年（1979）に保存を目的とする発掘調査が実施され，前方後円墳（第1号）1基，帆立貝式古墳（第4号）1基，円墳8基が確認され，その後さらに円墳2基が発見された。 第1号古墳の竪穴式石室からは，三角縁神獣鏡（さんかくぶちしんじゅうきょう）の外，獣帯鏡，車輪石，玉類，鉄斧等が出土しており，古墳時代前期後半（4世紀後半）の築造と思われる。第2号古墳の竪穴式石室からは，素文鏡・衝角付冑（しょうかつきかぶと）・鉄剣・蛇行剣形鉄製品・太刀・刀子・鏃・斧等が出土しており，中期前半（5世紀前半）の築造と思われる。 古墳群は，調査されたこの2基の副葬品等から見ると，いずれも太田川下流域の首長墓の中では中核的な位置を占めており，同地域の沖積平野と内海交通を掌握していたと推測される。		
国	史跡	広島原爆遺跡 旧燃料会館（現・平和記念公園レストハウス） 旧日本銀行広島支店 旧本川国民学校校舎（現・本川小学校平和資料館） 旧袋町国民学校校舎（現・袋町小学校平和資料館） 多聞院鐘楼 旧中国軍管区司令部防空作戦室	ひろしまげんばくいせき		広島市中区中島町，袋町、本川町，基町，南区比治山町	令和6.2.21			広島原爆遺跡は、第二次世界大戦の末期である昭和２０年（１９４５）８月６日に広島にアメリカ軍により投下された原子爆弾の被害の実相を伝える遺跡である。爆心地から１．４kmまでは人体に致命的な熱傷を与え、２km以内では大半の建物が全壊全焼した。原爆による被害は、爆風、熱線、放射線が挙げられ、同年中に約１４万人が死亡したと推定されている。 旧燃料会館（現・平和記念公園レストハウス）は、地階には火災痕である煤のある天井や、爆風の影響で押し上げられたと推定される天井スラブが残る。旧日本銀行広島支店は爆風による地階の扉の蝶番の損傷や、２階の木製の腰壁には窓ガラスの破片が突き刺さった痕などが残る。旧本川国民学校校舎（現・本川小学校平和資料館）は炭化した木煉瓦や焼け焦げた戸枠・配電盤が残る。旧袋町国民学校校舎（現・袋町小学校平和資料館）は被爆後臨時救護所となった際に記された伝言や炭化した木煉瓦が残る。多聞院鐘楼は爆風によって損傷した天井や梁をそのまま残す。旧中国軍管区司令部防空作戦室は、当時勤労動員されていた高等女学校の生徒が、電話により四国軍管区司令部と福山の部隊に被爆直後に被害を伝えた場所である。 広島原爆遺跡は第二次世界大戦末期における原爆投下の歴史的事実と、人類史上初めて使用された核兵器の被害、戦争の非情さを如実に伝える遺跡である。		関連施設：広島平和記念資料館（082-241-4004）
国	名勝	縮景園	しゅっけいえん		広島市中区上幟町外京橋川河川敷内	昭15.7.12			江戸時代初めの元和6年（1620），初代広島藩主浅野長晟（ながあきら）の命を受けた家老・上田宗箇（そうこ）が藩主別邸の庭として築庭したもので，泉部・御泉水と称せられた。以来，歴代の藩主が修飾を加え，特に天明年間（1781～1788），9代重晟（しげあきら）は京都の庭園師・清水七郎右衛門に大いに改修を行わせ，景観を整えた。 庭園は中央の濯櫻（たくえい）池に十数個の島を点在させ，北東側に迎暉峯（げいぎほう）などの築山があり，池畔や樹林の中に茶室や亭館を配してそれらを連絡する園路によって庭を回遊できるように造られている。この種の庭は回遊式庭園と呼ばれ，江戸時代の諸大名の大庭園の多くはこれに属する。 昭和20年（1945）原子爆弾により崩壊したが，その後復元，整備された。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	名勝	平和記念公園	へいわきねんこうえん		広島市中区大手町，中島町	平19.2.6			太田川（ほんかわ本川）がもとやすがわ元安川と分岐する三角州の最上流部に位置し，原爆死没者の慰霊と世界恒久平和を祈念して開設された都市公園である。 昭和24年（1949）の広島平和記念都市建設法の制定に伴い，平和記念施設事業として記念公園が整備されることとなり，競技設計の公募に応募した145点の中から1等に入選した丹下健三ほかによる作品に基づき，昭和25年（1950）に着工，同29年（1954）に完成した。 これと並行して，昭和27年（1952）には原爆死没者慰霊碑（公式名：広島平和都市記念碑）が整備され，昭和30年（1955）には広島　平和記念資料館　などが完成した。 　公園南端　の平和大通りから、広島平和記念資料館のピロティと原爆死没者慰霊碑　のアーチを経て原爆ドームへと延びる中軸線上の通視は、原爆死没者　の慰霊と世界恒久平和への願　いを確実に表現するものであり、視覚と　慰霊の行為を関係づけようとする丹下の優れた空間意匠及び構成の意　図が読み取れる。その東西に広がる樹林の区域及び河川区域を含め、公　園とその周辺の環境が持つ風致景観は優秀であり、慰霊と平和希求の象　徴的な場として芸術上・観賞上の価値及び公園史上の価値は高い。		関連施設：広島平和記念資料館（082-241-4004）
県	重要文化財（建造物）	三滝寺多宝塔	みたきでらたほうとう	1棟	広島市西区三滝町	昭43.1.12	三間多宝塔，本瓦葺，内部壁画，三間四面（2間1尺4寸四方）		大永6年（1526）の創建。もとは和歌山県の広八幡神社の境内に建っていた。山津波によって破損したため，天保6年（1835）に修理し，その後かなり手が加えられている。昭和26年（1951），原爆被災者の霊を弔うため，現在地に移築された。 　全影が比較的美しく，浄土寺や厳島神社の多宝塔につぐ古建築に属す多宝塔として価値がある。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色阿弥陀三尊来迎図	けんぽんちゃくしょくあみださんぞんらいごうず	1幅	広島市南区堀越二丁目	昭36.4.18		縦87.5cm，横37.5cm	室町時代中期（15世紀前半頃）の作。絹本は織り目の荒い素絹を用い，下地に顔料を施した上に描いている。 　中尊は雲上の踏分蓮座（ふみわけれんざ）に立ち，左手を垂れ右手を胸に弥陀の印を結んでいる。肌・衣ともに金泥で仕上げ，衣文ひだは繊細な網目文・亀甲文・毘沙門亀甲文・唐草文を金色の線で描いている。 　宝冠をいただき首に瓔珞（ようらく）を垂れた左（勢至＝せいし）右（観音）の二菩薩の脇侍もまた雲上の踏分蓮座に立ち，各々くの字形の前かがみの姿勢で，勢至菩薩は合掌し，観音菩薩は蓮華形の器を持った動的な表現をしている。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色不動明王画像	けんぽんちゃくしょくふどうみょうおうがぞう	1幅	広島市安佐南区祇園四丁目 （広島市南区宇品御幸二丁目　広島市郷土資料館保管）	昭48.12.18	絹本著色，掛幅装	縦105.4cm，横40.0cm	室町時代後期（15世紀後半～16世紀）の作と言われる。もと軸装であったものを額装している。裏面の墨書銘によると，広島藩主浅野吉長が，修復を加えた後，当時感神院と称した歓喜寺に寄進したものという。作者は禅僧の玄沢という。 　岩壁に立つ不動明王は，両眼を見開き歯牙はあらわさず，右手に剣を左手に索条を持っている。火炎光背及び着衣には朱色を施した痕が見える。像は鋭い筆致で表されている。		関連施設：広島市郷土資料館（082-253-6771）
県	重要文化財（彫刻）	木造仁王立像 　像内に永仁弐年の銘あり	もくぞうにおうりゅうぞう	2躯	広島市東区牛田新町三丁目	昭38.4.27	檜材，寄木造，玉眼	像高282cm	不動院の楼門にある檜材，玉眼入りの像で，阿形像の像内背板の墨書銘によると，両像とも大願主は円妙房阿闍梨（あじゃり）快賢，仏師は性智房らで，永仁2年（1294）の作であることを伝えている。更に阿形頭部耳後の矧目（はぎめ）に墨書があり，正保2年（1645）に芸州藩主が仏師善助をして，仁王像の両眼を補修したことも記している。鎌倉時代（1192～1332）の在銘の仁王像は全国でも数少なく，時代相をあらわす雄健な作品である。		
県	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	広島市安佐北区深川四丁目	昭46.4.30	寄木造	総丈270cm，膝張237cm，肩張145cm，顔面長93cm，顔面横52cm，右手幅29cm	室町時代中期（15世紀）の作である。肩より腹にかかる肩衣にはかすかな飜波（ほんぱ）式の彫法の痕が見え，体内には寄木（よせぎ）を支える組み木がうかがえる。寄木を継ぐには，要所を約12cmの鉄製カスガイでとめている。また，彫木の表面には荒目の麻布をはり，その上に黒漆を塗り，そして金箔をおくという本格的な手法がうかがわれ，更に差こみになっている左手首の枘には，時代を語る手斧（ちょうな）の削り痕が残っている。		
県	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1躯	広島市安佐南区沼田町伴	昭56.11.6	ヒノキ材，一木造	高さ95cm，膝張75cm	ヒノキの一本造りの坐像だが，膝張り部は他の木材を合わせて鉸（かすがい）止めしている。法衣は通肩（つうけん）にかけ両掌は膝上に弥陀の定印（じょういん）を結ぶ。白毫は木製品をはめ込んでいるが，後補と思われる。眼は彫眼になる。衣は薄いがかすかに翻波（ほんぱ）文を残す。像は重量削減とともに割れを防ぐため，内刳り（うちぐり）が施されている。鎌倉時代前期（13世紀）の作である。 　現在は，『芸藩通志』の廃寺の項にも記載されている雲岸寺跡と伝えられる小堂宇にまつられている。 ※白毫（びゃくごう）…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光を放つという		
県	重要文化財（彫刻）	木造薬師如来坐像 附　木造天部像　2躯 　木造神将像　2躯	もくぞうやくしにょらいざぞう	1躯	広島市佐伯区五日市町石内	平1.11.20	寄木造	像高85.0cm，膝張68.0cm	平安時代末期，12世紀の作。石内地区の町内有志により護られた仏像である。 　薬師如来像は檜材の寄木造，印相(いんそう)は右手の掌を前方に向けて挙げる施無畏印(せむいいん)で，左手は左膝上において掌を前方へ向ける与願印(よがんいん)の上に薬壺を置いている。頭部は刻み螺髪(らほつ)で，眉間に水晶の白毫を入れ，丸顔で眼は彫眼で伏眼となり，瞳孔は墨書き，耳は長大で耳朶(じだ)に貫孔がある。口元は小さく固く閉じていて全体として温雅な面相である。頸には浅い三道（さんどう）を刻み，衣は通肩（つうけん）にかけ，結跏趺座（けっかふざ）する。本像のほかに天部像2躯と十二神将像2躯が遺存しているが，ともに損傷は甚だしい。 ※白毫(びゃくごう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（工芸品）	金銅五鈷杵	こんどうごこしょ	1口	広島市安佐北区可部町綾ケ谷	昭37.7.20	金銅製	長さ23.5cm	室町時代初期（14世紀）製作と推定される，福王寺（ふくおうじ）に伝えられた作品。広島県内では厳島神社所蔵の五鈷杵についで古い作品と言われる。量感のある大ぶりなすぐれた作品である。 五鈷杵は，梵語（ぼんご）で跋折羅（ばさら）と言われ，心中の煩悩をくだき仏性の智行を表す意味で用いられる金剛杵の一種で，密教の修法に用いられたものの一部である。 福王寺は福王寺山山頂にあり，中世，安芸守護武田氏や熊谷氏と深い関係を持っていた。		関連施設：福王寺宝物収蔵庫（082-814-3930）
県	重要文化財（工芸品）	短刀　銘清貞 附　雲波文合口拵小刀播磨守繹広	たんとう	1口	広島市西区高須	昭38.4.27	反りなし，鍛え小板目，刃文直刃，小乱れ砂流し金筋入る	長さ28.5cm	室町時代初期（14世紀）の周防（山口県）の刀工・二王清貞（におうきよさだ）の作品で，三原物に近い作風であるが，額内真の俱利伽羅欄間（くりかららんま）透かしの彫り物は二王鍛冶独特である。この短刀は，打ちおろしのような健全さを保ち，彫り物も珍しい。 付の拵（こしらえ）も質素で気品のあるみごとな出来ばえで，広島藩抱えの名工，一方堂明政の作品である。もと浅野長訓の所用と伝えられる。		
県	重要文化財（工芸品）	刀　銘芸州三入住二王真清天正九年十一月吉日	かたな	1口	広島市中区幟町	昭45.1.30	本造，中鋒，鎬梢高く庵棟，鍛え板目，刃文皆焼	刃長67.6cm，反り2.3cm	天正9年（1581），可部三入（みいり，広島市安佐北区）に住む刀工・二王真清（におうまさきよ）の作品。中世における中国地方西部の刀工として著名なものには，周防の二王一派，石見の直綱一派があげられるが，安芸国においては見るべき土着の刀工は非常に少ない。わずか室町時代末期（16世紀）に，大山住宗重と二王真清をあげるにとどまる。 二王真清は，可部三入の城主熊谷氏の招きにより周防から移住した古刀芸州刀工中の名工で，その作品は極めて少ないが，本品は相州伝鍛法で作刀した保存のよい傑作である。		
県	重要文化財（工芸品）	鉄打出漆塗仏胴腰取胴丸具足 附　立浪文陣羽織　1領 槍　1本	てつうちだしうるしぬりほとけどうこしとりどうまるぐそく	1領	広島市西区古江東町	昭57.2.23		総重量13.250kg 兜／高さ35.5cm 面頬当／ 胴／高さ45.0cm 籠手／ 佩楯／横30.0cm，長さ24.5cm 臑当／高さ22.5cm 陣羽織／肩巾45.5cm，身丈82.0cm 槍身／長さ38.5cm	安土桃山時代（1573～1602）の当世具足の一つ。広島藩家老で茶人として知られる上田宗箇（うえだそうこ）が大坂夏の陣（1615年）の時に着用したと伝えられる。大形の風折烏帽子（かざおれえぼし）形の兜に，鉄の一枚板で作られた胴で，胴の前面と背面には銀箔で日の丸文が描かれている。製作も優れ，保存も良く，安土桃山時代を代表する甲冑である。 ※仏胴…当世具足の胴の形式の一種。鉄の一枚板で作られ，仏像の胸のようなところからその名がある。		
県	重要文化財（典籍）	紙本墨書三吉鼓家文書 正平六年正月廿五日後村上天皇綸旨　1通1巻 観応二年二月十五日足利尊氏下文外 20通1巻 附　三吉鼓家系図　1巻 康永二年五月廿一日僧覚弁軍忠状外 10通写1巻	しほんぼくしょみよしつづみけもんじょ	2巻	広島市中区千田町三丁目	昭33.8.1	紙本墨書，軸装		南北朝時代（1333～1392），備後の豪族であった三吉少納言房覚弁（かくべん）及びその子孫の活動を物語る古文書20余通からなる。この文書中，覚弁に関するものが最も多く，それも正平6年（1351）から2年間に集中している。この時期は観応擾乱（かんのうのじょうらん）の直後であり，在地武士の動きは複雑で，覚弁も正平6年正月に南朝の後村上天皇より綸旨（りんじ）を受け，観応2年（1351）2月には南朝方となった足利尊氏から下文（くだしぶみ）を受けており興味深い。 ※観応擾乱（かんのうのじょうらん）…南北朝時代，足利尊氏と直義の対立を中心とする争乱。1350～1352年を中心とする時期に起こった。		関連施設：広島県立文書館（082-245-8444）
県	重要文化財（典籍）	紙本墨書不動院文書 附　新山安国寺不動院由来　1冊 新山安国寺不動院雑記　1冊	しほんぼくしょふどういんもんじょ	4巻	広島市東区牛田新町三丁目	昭38.4.27	紙本墨書，巻子装		安土桃山時代から江戸時代初頭（16世紀後半～17世紀）にかけての文書群。4巻24通からなる。安国寺恵瓊（えけい）関係の書状，豊臣秀吉朱印状，毛利輝元や福島正則の書状などが見られる。 不動院の前身は平安時代（794～1191）の創建と伝えられ，南北朝時代（1333～1392）に安芸国の安国寺に設定された。戦国時代，瑤甫恵瓊（ようほえけい）が京都東福寺住持に出世し，毛利輝元・豊臣秀吉の信任を受け政治的にも活躍するようになると寺運は興隆し，堂塔の再建に力が入れられた。福島氏の広島入部後は，正則の祈祷師宥珍（ゆうちん）がこの寺に入り，臨済宗から真言宗にかえられ，寺号も宥珍が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。		
県	重要文化財（考古資料）	山崎遺跡出土呪術関連遺物 円形木札（墨書呪符）2枚 和鏡（蓬莱鏡）1面 銭貨　27枚 土師質土器　20箇 土師質土器破片　一括	やまさきいせきしゅつどじゅじゅつかんれんいぶつ		広島市西区観音新町四丁目（広島県立埋蔵文化財センター保管）	平8.9.30	円形木札／鏡の蓋となる 和鏡／銅鏡 銭貨／中世の輸入銭，開元通宝，宣徳通宝など	円形木札／直径108mm，厚さ1.5mm 和鏡／直径108mm，縁高8mm 土師器土器／口径12.8～15.8cm，底径6.3～7.6cm，器高2.6～3.5cm	これらの遺物は，山崎遺跡（三次市大田幸町所在）の土坑（どこう）から出土したものである。円形木札の呪符からみて調伏や悪霊退散のまじないにかかわる可能性が高く，何らかの呪術行為を行った後に一括埋納されたものと考えられる。中世の呪術関連遺物である。 埋納された時期は，円形木札に記載された干支の「丁酉（ひのとり）」，和鏡，銭貨，土師質土器からみて天文6年（1537）（室町時代後半）が考えられる。 これらの遺物は，室町時代（1333～1572）の民間信仰の様相や精神文化の一端を解明する上で重要な資料である。		
県	重要文化財（歴史資料）	広島県深安郡山野村役場文書	ひろしまけんふかやすぐんやまのむらやくばもんじょ	8,071点	広島市中区千田町三丁目（広島県立文書館　寄託）	平25.1.24	3,400冊，4,099綴，56括，105袋，20包，265通，79枚，８点，２箱，35軸，１折，１本	8,071点	山野村（現在の福山市山野町）が近代の自治体として存続した期間に，山野村役場で作成及び収受された行政文書を中心とする文書群（もんじょくん）である。役場の各職掌が作成した簿冊，国の法令，県・郡の布達類から成り，その前後に当たる近世の庄屋文書（しょうやもんじょ）及び加茂町山野支所の行政文書なども含む。 明治維新及び第二次世界大戦という二つの大きな社会変革期を含む自治体文書がまとまって伝来している例は，全国的に見ても極めて希少である。 また，役場の全ての職掌で作成された行政文書が連続して伝来しているため，役場の行政事務の変遷，村の現状と課題，国や県とのやり取り，村民の生活など，村と村民の具体像についてどの時期をとっても多面的に明らかにできるとともに，一つの村を対象にそれらの変遷を解明できるという，学術資料として高い価値を有する。 さらに，大正期という早い時期から行われた地元の方々による文書保存活動は，地域住民による資料保存活動の先駆けであり，貴重な例として顕彰することができる。		関連施設：広島県立文書館（082-245-8444） 写真提供：広島県立文書館
県	史跡	矢野城跡	やのじょうあと		広島市安芸区矢野町	昭12.5.28			後醍醐天皇による建武の新政の後，建武2年（1335）11月には足利尊氏(あしかがたかうじ)が新政に叛旗をひるがえし，南北朝の争乱が始まる。安芸国の守護武田氏をはじめ，芸備の御家人武士の大半は尊氏方に同調したが，その年の12月，安芸の熊谷(くまがい)四郎三郎蓮覚(れんがく)（直行）は，南朝方に組したため，守護武田氏をはじめ，吉川氏，毛利氏，さらに蓮覚の惣領家の熊谷氏までが蓮覚の守る矢野城を包囲攻撃し，蓮覚は戦死して城は落ちた。 矢野城は保木(ほき)（発喜）城ともよばれ，南方は絵下山を後衛とし，北は矢野川の谷が開けて大手となり，西方は明神山の尾根に茶臼山があって搦手(からめて)をなし，さらに海岸の遠見の城に連絡している。この城は室町時代後期（15世紀中葉）にはこの地方の領主，野間氏の居城となった。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	頼家之墓 ※頼は旧字	らいけのはか		広島市南区比治山町下組 多聞院境内	昭15.2.23			植田艮背（うえだこんばい）の墓地に接して，頼春水・梅[84b0](ばいし)夫妻，頼杏坪(きょうへい)，山陽の子聿庵(いつあん)，孫誠軒，古樵(こばい)，成一と頼家一族の墓が並んでいる。 頼家は江戸時代後期に文運の盛んな竹原の紺屋の出身で，学問の家の誉れがある。春水は山陽の父で，天明元年（1781）広島藩儒となった。その詩文を編した春水遺稿7冊，意見書等関係文書を集成した春水遺響26冊がある。文化13年（1816）71歳で没した。春水の弟杏坪は，天明5年（1785）藩学問所に登用され，文化8年（1811）50歳を過ぎたころから郡代官・郡廻り・三次町奉行を歴任し，直接民政をつかさどり，一方，修史局を総裁して，芸藩通志159巻を編修するなど，地方文化の向上にも尽くした。天保5年（1834）79歳で没した。		
県	史跡	官立綿糸紡績工場跡	かんりつめんしぼうせきこうじょうあと		広島市安芸区瀬野川上瀬野字奥畑乙	昭15.11.10			明治初年，殖産政策の一環として綿糸紡績業の振興をはかるため，政府は当時綿花の産出が多かった愛知と広島に洋式紡績機を備えた工場を設立することにした。動力として水力を選んだため広島ではこの地に決まった。工場は，明治15年（1882）落成寸前に士族授産のため広島綿糸紡績会社に払い下げられたが，この工場が日本の紡績事業を刺激興隆されたことはいうまでもない。今日6反5畝（約6500㎡）の工場敷地には石垣が残るのみであるが，延々600mの水路と動力の中枢であった水車に通ずる水門余水の調節口などによって，往時の様をしのぶことができる。		
県	史跡	植田艮背之墓	うえだこんばいのはか		広島市南区比治山下組	昭17.6.9			植田艮背(うえだこんばい)は字(あざな)玄筋，神儒一致を唱えた京都の山崎闇斎(やまざきあんさい)の高弟である。広島藩の中興の祖といわれた五代浅野吉長(あさのよしなが)に迎えられ，広島藩に神儒学を伝えた。山崎闇斎(やまざきあんさい)の垂加草全集三十巻は彼の編集になる。 艮背は藩儒として活躍するだけでなく，当時経済的実力を背景に学問に関心を示すようになった富裕町人層の教育にもあたった。享保20年（1735），85才で死去。比治山の西麓の多聞院(たもんいん)境内に葬られた。		
県	史跡	比治山貝塚	ひじやまかいづか		広島市南区比治山本町	昭25.3.22			比治山の南麓に位置する縄文時代（約12,000～2,300年前）の貝塚である。当時は太田川の三角州が発達しておらず，貝塚は広島湾奥の島の汀線付近にあったと思われる。戦時中の軍の工事によりその主要部分が破壊されたが，昭和23･24年（1948･1949）の調査では，地表下30cmに厚さ約1.5mの貝塚が確認された。貝層は，上・下の2層に分かれ，上層から縄文時代晩期前半（約2,500年前）の灰褐色磨研土器，下層から縄文や同心円状の磨消縄文をめぐらす縄文時代後期後半（約3,000年前）の土器などが出土している。石器としては，石鏃(せきぞく)，石匙(せきひ)，漁網に使用される石錘（せきすい），自然遺物としては，シカの骨，タイの骨，ハマグリ，カキ，アサリ，シオフキなどの貝類が出土しており，狩猟や漁撈を中心とした生活が明らかになった。		
県	史跡	熊谷氏の遺跡 伊勢が坪（塩が坪）城跡 高松城跡 土居屋敷跡 菩提所観音寺跡	くまがいしのいせき〔いせがつぼ（しおがつぼ）じょうあと，たかまつじょうあと，どいやしきあと，ぼだいしょかんのんじあと〕		広島市安佐北区 大林 可部	昭26.4.6 昭45.1.30（追加指定，名称変更）			中世安芸三入荘を中心に活動した熊谷氏に関わる遺跡群である。伊勢が坪（塩が坪）城・高松城跡・土居屋敷跡・菩提所観音寺跡からなる。 伊勢が坪（塩が坪）城は，熊谷氏が最初に拠ったところで，高さ30mの丘の上にある土居形式の城である。上中下の三段及び後の段などの郭に分かれ，上段には井戸跡もある。拠点を高松城に移した後も隠居所として使われ，北側には菩提所の一つである蓮華寺跡がある。 高松城跡は，三入荘の南の入口に位置し，220mに及ぶ峻嶮な山城で，熊谷氏が戦国時代初期に拠点を伊勢が坪からここに移したものとみられる。山頂近くに本丸，二の丸，馬場，鐘の段，明覚寺跡など規模の大きい郭が配置されている。 土居屋敷跡は，熊谷氏が平生使用している屋敷，政庁跡である。周囲に堀をめぐらせた跡もみられ，正面と北側の一部に築地石垣が現存し，正面中央に門の跡もある。 菩提所観音寺跡は，巨石で築かれた石垣が現存する。現在小さい堂を残すのみであるが，堂内には熊谷氏の定紋を刻んだ室町時代（1333～1572）の須弥壇がある。また，南側に五輪塔，宝篋印塔が並ぶ墓所がある。		
県	史跡	銀山城跡	かなやまじょうあと		広島市安佐南区祇園町，安古市町	昭31.3.30			安芸国の守護武田氏の城跡。武田氏は承久3年（1221）守護に補任されてから，天文10年（1541）滅ぼされるまで約300年間この山城に拠っていた。その後も大内氏ついで毛利氏が城番を置いた重要な城であった。馬返し・御門・千畳敷・観音堂跡・上高間・下高間・馬場などの曲輪が山麓から山頂までの諸所に残っている。		
県	史跡	木の宗山銅鐸銅剣出土地	きのむねやまどうたくどうけんしゅつどち		広島市東区福田町狐が城	昭31.3.30			遺跡は木の宗山の中腹200mの地点に所在する。現地は狐が城えぼし岩（高さ2m）の下手わずか一坪ほどの平地で，その前面は東に向かって急傾斜する。明治24年（1891）に立石の前に横たわる平石の下から，銅鐸1，銅剣1，銅戈（どうか）1が出土した。銅鐸は高さ19.0cmで，邪視文と呼ばれる特異な文様をもち，古式の銅鐸とされている。銅剣は長さ39.7cm，銅戈は長さ29.5cmでいずれも実用の武器から退化した型式である。これら弥生時代（紀元前3世紀～3世紀）の青銅器は，山腹の大立石の下から発見されたというその出土状態と，銅鐸の出土地としては西端にあり，しかも銅剣・銅戈などと共に出土する点などに特色があり，古くから研究者の注目をあびた。		
県	史跡	牛田の弥生文化時代墳墓	うしたのやよいぶんかじだいふんぼ		広島市東区牛田早稲田早稲田神社境内	昭33.3.13	土壙墓	直径1.3m，深さ1.5m	太田川河口の三角州を望む早稲田山（標高約50m）の東斜面に位置する。昭和32年（1957），早稲田神社の再建工事の際に発見された弥生時代中期後半（約2,000年前）の土壙墓（どこうぼ）である。土壙は上縁の直径1.5m，深さ1.5mで，底には20～30cm大の石がすり鉢状におかれていた。土壙の底から70～80cm上部から，頭蓋骨，下顎骨（熟年男性）の一部が検出された。円筒形の土壙のなかに，座位屈葬の形で埋葬したもの と推定される珍しい例である。土壙の上面には，ハマグリ･カキなどを中心とする小貝層があり，弥生時代中期後半の土器片や石鏃（せきぞく）が出土した。なお，西側傾斜面には，縄文時代早期（約9,000～6,000年前）の遺物包含層が分布し，押型文土器や石鏃などが多数採集された。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	湯之山旧湯治場	ゆのやまきゅうとうじば		広島市佐伯区湯来町和田字上湯之山 湯之山明神境内	昭33.8.1			湯ノ山温泉の湧出は，富士山が大爆発した宝永4年（1707）のことである。寛延元年（1748）には盛んに涌き出たので藩主浅野吉長(よしなが)の知るところとなり，翌2年（1749）には，藩儒堀正脩(ほりせいしゅう)も来遊して「雲泉記」を著わした。霊験著しく，領内領外よりの入湯者は旬間千人に達することも少なくなく，37軒の宿屋があわただしく建築されるなど活況を呈した。藩も湯所役人を任命して入湯の監督，湯所の保全にあたっていた。 現在では，旅館は数軒に減じているが，岩壁を掘削した湯ぶねからは，温度20度のラジウム泉が涌き出ており，旧来の湯坪，湯屋，湯ノ山神社の諸施設は当時の姿をよく伝え保存されている。		
県	史跡	地蔵河原一里塚	じぞうがわらいちりづか		広島市安佐北区可部下町屋横川	昭40.4.30			古い石州街道は，今日のように亀山，飯室及び鈴張を迂回せず，南原峡沿いに進み，可部峠を越えて現在の山県郡北広島町本地に抜けていた。かつてはこの街道に沿って一里塚が置かれていたが，今日，ほとんど消滅し現存するものは珍しい。この地蔵河原一里塚は，現在の路面が相当地上げされているため，塚の原型は失われている。		
県	史跡	畳谷弥生遺跡群	たたみだにやよいいせきぐん		広島市東区上温品字畳谷	昭49.4.25	弥生時代終末期～古墳時代初頭，竪穴式住居4，貝塚1，土壙9，壺棺墓1		温品川左岸の北から南にのびる標高100m前後の丘陵尾根上に位置し，弥生時代終末から古墳時代初頭（3世紀）にかけての遺跡群である。遺跡は尾根の東部，中央，西部の3群からなり，各群には住居，貝塚，墳墓などがあり，それぞれ完結した生活単位を構成する。現在，県立安芸高校の敷地内に県史跡として保存されているのは東群で，竪穴式住居跡4，土壙（どこう）および土壙墓9，壺棺1，貝塚1からなり，環境整備を行って公開している。		
県	史跡	恵下山・山手遺跡群	えげやま・やまていせきぐん		広島市安佐北区落合3丁目，真亀3丁目（恵下山遺跡）字真亀（山手遺跡）字山手	昭49.4.25			太田川下流左岸には，標高100m前後の丘陵が河岸にまで迫っている部分が多い。このような丘陵を対象とした高陽ニュータウンの造成地内から，各種の遺跡が検出されたが，そのうち重要な恵下山遺跡群，恵下山城跡及び山手遺跡群の3箇所が，県史跡に指定保存されている。 恵下山遺跡群，山手遺跡群は，弥生時代終末から古墳時代初頭（3世紀）にかけての集落跡で，竪穴住居跡・土壙・古墳などが検出されている。 恵下山城跡は単郭の城跡で，背後と尾根先端に堀切が配されている。出土遺物から14世紀後半頃の城跡と考えられる。		
県	史跡	西願寺山墳墓群	さいがんじやまふんぼぐん		広島市安佐北区口田2丁目字西願寺	昭49.4.25	竪穴式石室6，箱式石棺1，土壙墓14		太田川下流左岸の丘陵尾根上に築かれた墳墓群で，丘陵頂部から尾根の平坦な部分5か所にわたって分布していた。現在は，方形台状に削り出された下端部2か所の竪穴式石室6，箱式石棺1，土壙14が保存されている。竪穴式石室は，太田川から運びあげた径20～30cmの円礫（河原石）で築き，石室上面がひろがり，蓋石の存在しない特異な形態である。石室内や墓域内から鉄器類（剣・鑿(のみ)・斧・鏃など）や土器類が出土しており，特に鉄斧は扁平な鋳造品で，我が国では類例は少ない。弥生時代終末から古墳時代初頭（3世紀）にかけての，地域的な特色の強い集団墓である。下流左岸約2kmの丘陵上には三角縁神獣鏡を出土した中小田第1号古墳がある。		
県	名勝	石ケ谷峡	いしがたにきょう		広島市佐伯区湯来町菅沢	昭12.5.28			石ヶ谷峡は，瀬戸内海に流れる太田川の支流の水内(みのち)川の一支谷で，花こう岩の河床に清流が流れ，奄頭の滝など多くの滝がある。峡谷内は，兜(かぶと)岩・名号岩などの奇岩に富む。わけても屏風(びょうぶ)岩は直立40～50mから120mにおよび，またこうもり岩は約300mそばだち，峡の二大景観をなしている。		
県	天然記念物	正伝寺のクロガネモチ	しょうでんじのくろがねもち		広島市安佐南区安古市町相田	昭28.4.3			クロガネモチは本州中南部から台湾・中国の暖地に分布する雌雄異株である。本樹は，地上約5mより枝を出し始め，短円柱状の樹冠部を形成している。クロガネモチでは県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	長束の蓮華松	ながつかのれんげまつ		広島市安佐南区長束二丁目	昭29.4.23			本樹は，山門を入った右手にあって，四方に展開する枝は蓮光寺の前庭約530㎡をおおっている。樹種はクロマツで3本の大枝から分かれる大小14枝が見られ，これらは24本の支柱によってほとんど水平に支えられ，陣笠状の樹冠を構成する。 寛政7年（1630）の植樹といわれ，広島藩主はその美しい樹形を称して，「近江唐崎の松」もはだしで逃げるであろうとの意味から本樹を「跣足唐崎松」と命名したと伝えられているほど名木の聞こえが高い。		
県	天然記念物	新庄の宮の社叢	しんじょうのみやのしゃそう		広島市西区大宮一丁目	昭29.6.30			本社叢は，クスノキ・タブ・サカキなどの常緑広葉樹，ケヤキ・エノキ・ムク・ムクロジュなどの落葉広葉樹からなる社叢で，戦前の市内の樹叢の景観をとどめている。 クスの大木2本は，新庄の宮の夫婦楠で，東方のものは婦楠(おんなぐす)，西方のものは夫楠(おっとぐす)と呼ばれ，それぞれ胸高周囲5.35m，6.40mに達する。 新庄之宮神社は，社伝によると，正慶年間（1332～4）に紀州熊野神社の分霊をこの地に勧請したものと伝えられている。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	神原のシダレザクラ	かんばらのしだれざくら		広島市佐伯区五日市町石内字神原小字京晨	昭48.3.28			シダレザクラはエドヒガンから作られた園芸品種で，名のごとく枝が垂れ下がるのが特徴である。どちらかと言えば寒冷の地を好むため，本州中部以北ではかなりの大木も見られるが，沿岸地に近い温暖なこの地に，これだけの大木（樹高約10m，胸高幹囲2.42m）があるのは珍しい。		
県	天然記念物	馬木八幡神社の社叢	うまきはちまんじんじゃのしゃそう		広島市東区安芸町馬木	昭53.1.31			本社叢はシイを主とする常緑広葉樹林で，コナラ，アベマキ，コシアブラなどの落葉樹もいくらか混生しているが，この地方の暖帯極相林の原形をほぼ保っている。本社叢に多く見られるシイモチは，中国地方西部及び九州に分布する常緑高木で広島市から山口県下の島嶼や沿岸部のシイ林に普通に見られるが，広島市付近及びそれより北の地域では極めて珍しい。また，林床にジュズネノキ（常緑小低木）が多いものもあまり例がなく注目に値する。		
県	無形文化財	一国斎高盛絵	いっこくさいたかもりえ		広島市中区江波東二丁目	平23.4.21			一国斎高盛絵とは，「堆彩漆(ついさいしつ)」と呼ばれる極めて類例の少ない独特の漆芸技法である。鎌倉時代から行われている高蒔絵(たかまきえ)の錆(さび)上(あ)げの技法をベースにして，歴代の一国斎が漆絵や堆朱(ついしゅ)・堆黒(ついこく)などの様々な技法を付加していき，広島在住の三代金城一国斎が幕末・明治期に完成した。 歴代一国斎の作品には，茶器，文箱，硯箱，香箱，菓子器，飾盆などがある。これに，ボタン，ユリ，モミジ，カキツバタ，ウリ，アシナガバチ,トンボ，ハチなどの植物や昆虫を高く盛り上げて描き出す。中でもアシナガバチを草木花に配するのが一国斎の特色である。 池田昭人氏は，この一国斎高盛絵の技法を五代・六代から継承するとともに，たゆまぬ研鑽と創意工夫を重ねてきている。その作品は，絵画的なやわらかさと彫刻的な重厚さを併せ持つ一国斎高盛絵の芸術世界を見事に表現しており，全国的にも高い評価を受けている。		
県	無形民俗文化財	神楽―五龍王―	かぐら―ごりゅうおう―		広島市佐伯区湯来町	昭38.4.27			地元では，かって「川井の舞」と称していたという，この神楽は，秋祭りの氏神の水内八幡神社や和田郷一帯の神社で舞われる。 五龍王は，他の地方で王子神楽とか五行祭とか言われている舞で，五人の龍王が遣産配分について四と一に分かれて争い（皇子道行）激しい戦いののち（ハッ花・白湯・五刀）あい和解する（皇子合戦）という一連の長い神楽である。		
県	無形民俗文化財	神楽	かぐら		広島市安佐南区	昭40.10.29			秋の祭礼に阿刀明神へ奉納されるこの神楽は，瀬戸田をはじめ瀬戸内海沿岸の呉地方や旧安佐郡に見られる十二神祇系の神楽であるが，言立の発声法や太鼓の打ち方，舞い方に他とは異なるものがあり，他系統の技術が入っているものかと思われる。 十二の演目は技術的にもすぐれているだけでなく，よく古風を伝え，「鼓の口開け」「湯立舞」「煤掃き（すすはき）」「神降し」等にそれが見られる。最後に舞われる「将軍」は，託宣を行う形式をとどめる珍しいものである。		
国	登録有形文化財（建造物）	広島大学附属中・高等学校講堂（旧制広島高等学校講堂）	ひろしまだいがくふぞくちゅう・こうとうがっこうこうどう（きゅうせいひろしまこうとうがっこうこうどう）	1棟	広島市南区翠一丁目	平10.9.2	鉄筋コンクリート造2階建，昭和2年（1927）建設	建築面積507㎡	旧制広島高等学校の講堂として昭和2年（1927）に建築された。鉄筋コンクリート造り平家建てで，一部に2階桟敷席が設けられ，正面に車寄が付く。外壁は石造風に仕上げ，1・2階通しの柱型付きとし軒先に装飾タイルを貼る。全体として様式建築を簡素にまとめた意匠構成となるが，仕事は丁寧で技術的に見るべき点は多い。 旧制広島高等学校は大正12年（1923）設置，専門的な高等普通教育が行われたが，昭和24年（1949）新制広島大学に統合された。		
国	選定保存技術	手打針製作	てうちばりせいさく		広島市安佐南区伴東	平成30年（2018）9月25日（選定・保持者認定）			手打針製作は，染織品の縫製や刺繍等に用いられる針を製作する技術である。 針は，衣装等の製作に用いられる様々な工芸技術を支える最も基本的な用具であり，古来，多種多様な形態の針が発達してきた。伝統的な手打針の製作工程には，原材料である針金の切削，針頭(かぶと)の成型，穿孔，焼き入れと焼きなまし，研磨等があり，それぞれに精密かつ高度な技術が必要とされる。 手打針は，多彩な工芸技術の内容と意匠表現に対応するように，太さ，長さ，針頭や針孔(めど)の形，先端の尖り等が細やかに調整されたもので，極めて多種にわたる。また，使用する糸の色艶を損ねず，速く正確に縫えるよう形状に工夫が重ねられ，機能性が高い。しかし，明治時代に欧米から新たな技術が導入され，それ以来，機械製の針が広く普及し，手打針の存在を凌駕するようになった。 今日においても良質の手打針は，日本刺繍のような伝統的な工芸技術や，染織品等の有形文化財の保存技術のために不可欠のものであるが，製作者が激減し，供給が危ぶまれている。 保持者の小島氏は，伝統的な手打針の製作技術を高度に体得しており，日本刺繍や有形文化財の修復等に用いられる様々な種類の手打針を製作し，その品質は関係者から高い評価を得ている。		
国	記録記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	阿刀神楽	あとかぐら		広島市安佐南区	昭和40年（1965）10月29日（県指定） 昭和55年（1980）12年12日（選択）			古くから阿刀明神社の祭礼に奉納されてきた神楽で，石見出雲流神楽の流れをくむ。@　一二の演目によって構成される「十二神祇系」で，「鼓の口開け」に始まり，「湯立舞」「所務分け」「将軍」などの舞が，大太鼓（宮太鼓），笛，鉦（銅拍子）によるいろいろな調子の囃子に合わせて舞われる。@　もともとこの神楽は，天照大神，宗像三女神を祭る阿刀明神社の秋祭りに奉納されたものであったが，江戸時代後期，周防国（山口県）から移ってきた宇高宗助によって，柔術の型を取り入れた現状の形式に作り上げられたと伝えられる。		